

## 環境思想における人間中心主義の再考

長門 雄治（岩手大学・博士課程）

環境問題の顕在化を背景に、近年環境問題への関心が集まっている。この流れを受け、学術分野でも「環境」を冠におく学問が多く存在している。これらの学問の共通テーマは、環境問題の解決・緩和であり、それぞれの分野から学問的アプローチが試みられている。環境思想は、環境問題に思想的アプローチを行う学問である。環境問題を背景とし、環境問題の解決・緩和という大義を持つ、という側面から考察すると、環境思想の学問的意義は、「環境問題の思想的原因の探求」、「環境問題対策の思想的指標の構築」であると考えられる。

すなわち、環境思想には環境問題の思想的原因を総括し、次世代につながる思想的指標を構築することが求められる。

環境思想が盛んに議論され始めたのは、1970年代（岩佐茂『環境保護の思想』）である。それ以降現在に至るまで、様々な論点が提供され、議論されてきた。その中で、報告者が注目したのは、「人間中心主義と非人間中心主義の対立」という点である。「人間中心主義と非人間中心主義の対立」は、環境思想内では最も原始的な論点の一つである。環境思想の議論が活発化した1970年代、アメリカにおいて環境倫理学が成立した。その多くは、環境問題の思想的原因を「人間のために自然を手段化する人間中心主義」（岩佐茂『環境保護の思想』）的思想とし、新たな倫理学として非人間中心主義的環境倫理学が提唱された。非人間中心主義的環境倫理学の元で、人間中心主義は批判された。その一方で、非人間中心主義的思想を批判する主張もなされてきた。また、近年においては、この対立を批判し、新たな第3の立場を主張する動きもみられる。1970年代以降現在に至るまで、「人間中心主義と非人間中心主義の対立」という論点は、議論を重ねているものの、対立の克服に至っていない。本報告では、「人間中心主義」という言葉が、それぞれの立場で異なる概念として捉えられているのではないか、という問題意識を持ち、それぞれの立場で描かれている人間中心主義を類型化し、分析することで「人間中心主義と非人間中心主義の対立」に考察を加える。